伝える。必要だから、生きがいだから

機関紙 当事者目線で

障害者が力を合わせて編集する機関紙「オンリーワン」の編集委員メンバー

福祉の現状、障害者自らが取材して伝えます。西条市社会福祉協議会（同市周布）が発行する機関紙「オンリーワン」は、障害種別、程度が全く異なる市内の10人が力を合わせて編集を続け3年目。仕事やスポーツに励む障害者の姿や福祉施設の特長を紹介するメディアとして親しまれている。

西条市社協

障害者10人 編集に一丸

福祉の現状紹介し3年目

機関紙はB5判4ページで、2カ月に1回発行。350部を印刷し公共施設などで配布している。編集委員（大岩敏昭代表）は同協議会の障害者向けパソコン講座が母体。「学んだことを生かし働きたい」と集まったメンバーに、同協議会が機関紙製作を委託した。

「きちんと雇用契約して障害者が働く施設があるよ」「スポーツで賞をとった人を紹介したら」。次号のメーンテーマを決める編集会議では、メンバーが活発に情報交換する。取材・執筆は、そうつ病を患った大岩代表（44）と、半身が不自由な梅野幸恵さん（57）。カメラが得意な山内信子さん（70）は足に障害があるが同行し、取材現場を生き生きと撮影する。

市内の高齢者デイサービスで働くうつ病女性を紹介した回は、大岩代表が担当。「やりがいを持っていても、症状が悪化した時は連絡できずに欠勤してしまう」と、就労の苦労を聞き取り。それでも女性が他の職員の理解を得ながら働き続ける姿を見て、「諦めず探せば、理解してくれる会社と巡り合うことができると感じた」と感想をつづる。

作業所訪問記では、通所者の仕事内容を紹介し「ゆったりした環境と、スタッフの優しい雰囲気が最高」。執筆した梅野さんは「自分の経験に照らして『障害者の居心地が良い場所はどこ』と考えながら書いている」。

原稿と写真が集まると、先天性の病気で肢体が不自由な高須賀友哉さん（22）がパソコンを駆使しレイアウト。統合失調症の男性（28）が描くイラストなども添え、華やかな紙面に仕上げる。

当初はメンバーが互いの障害を理解できずぎくしゃくすることもあったが、ペースを守って発行し12月で16号目。大岩代表は「みんな情熱を持っているから、作業が楽しみ。多くの人に読んでもらって、将来は仕事としてできるようになれば」と夢を語った。

（今西晋）